

やしきたかじん

歌手・タレント

木村政雄編集長 SPECIAL INTERVIEW

木村政雄

ファイブエル編集長

団塊世代は 自由になれるチャンス！

テレビでの毒舌でおなじみのやしきたかじんさん。自分を冷静に分析し、準備を怠らない姿勢が自信を生む。初の雑誌編集長に挑戦、他に映画監督としての活動も始動。また七年ぶりとなるコンサートツアーで全国を巡る。低迷する関西を憂い、アンチ東京のスタイルを崩さないキャラクターの裏に、実にセンチティブな彼の素顔が潜んでいた。

木村 やしきたかじんさんって、こういう対談はあんまり受けられませんかよね。

やしき そうですよ。いつも一〇〇万ギラ貰っても受けへん。今回はインタビューが木村さんやから受けさせてもらいました。だいたい芸能人が本道を外して、いろんな仕事しながら、プライドプライドって言ってる所がものすごく嫌なんです。常に義憤に感じてますね。自分のキャラクターでパチンコ台作らしたりね。

せっかく今まで志持ってやって来たのに、ちよっと有名になったからってそういう仕事は世間に失礼ですよ。

木村 だから、あんまりインタビュー資料が無いんですね。今回苦労しました（笑）

もともと、新聞記者を志望されてたんですよね。

やしき そうなんです。当時はまだ東大、早稲田、同志社くらいしか新聞学科ってのが無くて、東大は無理ってわかってましたから、早稲田受験の為の夏期講習とか行ってたんですよ。でも東京弁に合わへんかった。『サア』

『サア……って煩いわいって。それで京都に転がり込んで、バイトしながら遊んでたんですけど、周囲の友達がいろいろ段取りしてくれて龍谷大学には行きましたけど、当時は学園紛争の時代やったんでほとんど行きませんでしたねえ。京都時代に、このオーナーが音楽のわかる人でね、ハンバーガーが暇になったんで、夜をステキハウ

スにする事になってそこで唄ってくれといわれた、それが歌手になったきっかけですね。**木村** 歌手で食えるようになるまで二〇年か

かった、ってどこかで読んだ事ありますが、その売れない間はどんな気持ちで居たんですか？

やしき 俺が世界で一番歌巧いわい！ と思ってましたね。時代がまだ自分に追いついてないんやと。だからテレビ見て、もし自分がこのテレビに出てたらもったこうする！ とか、暇にまかせて思っていましたね。

木村 常に準備はしとかないとダメって事ですね。世間では、やしきたかじんって好き勝手にテレビに出て、好き勝手に酒を飲んで、好き勝手に生きてるイメージを持たれてますけど、実は緻密でナイーブ人だと、ずっと思ってたんですよ。自宅でもそれだけ番組のビデオを観られたり、戦略家でもあるなあと考えていたんですよ。

やしき 端的に言うとな、番組収録の当日になぜ打ち合わせがあるのか！ って事なんです。僕の場合は常に番組の事考えていろんな事を吸収してるわけです。それはどこかで強迫観念みたいなものが働いてるのもあるんですよ。だったら収録の日はただ撮るだけでええんじゃないかと思うんですよ。自分は器用でないし、その為の準備を常に収録までにやってるんですよ。

木村 今の仕事のベースはどんな感じなんですか？

やしき 今はレギュラーの収録とかで、月に六日だけ働いています。他の日はまあ休みなんで飲みに行って、後はテレビやらビデオを

一日一五時間くらい観てますね。

木村 一五時間もですか。すごいですね。まあそれだけ他番組をチェックしていると休みとは言えないですよ。ところで飲みに行かれるのは、やっぱり北新地が多いんですか？

やしき 京都では最近先斗町が多いですし、もちろん北新地、それと銀座ですねえ。なんか最近、飲むものに拍車がかかって来ましたが（笑）

木村 なんでそんなに一所懸命に飲むんですか？

やしき やっぱり仕事は拡げると拡げただけ、荒くなると思うんですよ。それは視聴者に対して失礼ですよ。

木村 今後もそのペースで仕事を増やすつもりは無い？

やしき やっぱり仕事は拡げると拡げただけ、荒くなると思うんですよ。それは視聴者に対して失礼ですよ。

木村 でも最近はそのいうデリカシーのある芸能人少なくなってるでしょ。レギュラー何十本とか、ギネスに挑戦とか……。

やしき ほとんどがそうじゃないですか？もう目的がわからないですよ。そんな事でギネスに登録されて何の意味があるんだろうと思いますよ。視聴者不在も甚だしい。

世間でボクが怖いイメージっていうのは、今まで大きな芸能事務所に属せずに無所属でここまで来たからなんです。暇やった頃に毎日テレビを観ていてある事に気づいたんですよ。「怒り」が空いてるなあ……って。「司会者





何度か全国ネットにと局側から打診ありましたが、それやったらやめるって言ってるんです。わざわざ三宅先生とかが東京からやって来て本音で喋ってもらってるんです。やっぱり違うんですよ、ネットになると話す内容が。言葉狩りとかスポンサーへの配慮とか、いろんな問題が出てきますから。だから番組が終わる時は三宅先生の死ぬ時って決めてます。本人にも言ってますし（笑）

木村 アンチ東京、仕事増やさない、納得いく仕事ってなるとリスク高いですよ

やしき それは受けて立とうと思ってます。メディアはテレビだけではないんだし。そこがテレビの人間の傲慢なところやと思うしね。

木村 横山（やすし）さんに似てますね。なんでもっと楽に生きないの？ って所が。

やしき いやあ、横山さんはホンマにしんどかったと思います。逆にこうは生きんこと

思いましたもん。死んで神格化された部分もあったでしょうね。ものすごく孤独な天才やったと思います。僕は自分なりに楽しく生きてますよ。

木村 A B C（大阪・朝日放送）はやっぱり出ないんですよ。

やしき だって無責任な新聞社から来た役員が、現場の人間が一所懸命積み上げたものを一瞬に原爆の如く壊すんですよ。だからいつも喧嘩してしまうんです。やっぱり新聞社とは分離させないとダメやと思うんです。そんな事言うてるから出演できるチャンネルが減っていくんですわ（笑）

木村 放送局の上層部がもつとがんばってもらわんとだめですね。

やしき 金がないから制作費削るなんて、中学生でも考えるんですわ。

木村 自分の給料下げるなんて言うテレビ局

の役員は居ませんもんね。

やしき 役員の報酬を一〇%削ったらどれだけ番組の質が上がるかわかりませんよ。これは公務員の気質と一緒ですわ。テレビ局に入社しても、ほとんど制作に行きたい人間が居ないらしいですね。編成とか事業とか、そんなん何が面白いねんと言いたい。社会の気質が変わってしまったって言うからダメなんです。団塊世代が辞めて一番困ってるのは下の世代ですよ。やっぱり現場の作り手の知恵によって番組も会社も変わるんですわ。

もつと国じゅうコケたらええんです。人間って貧して解るって事が多いと思うんです。ビッグスリーの問題でもね、給料下げないのに、金が無いから会社が潰れるって平気で言うんです。特にアメリカ的な考え方がね。今回はアメリカ中が路頭に迷ってますけど、一番大切な事を知る上では大事な時間やないで

やしきたかじん

1949年、大阪市生まれ。桃山学院高校では新聞部に所属し、朝日新聞主催の全国新聞コンクールへの入選も果たす。桃山学院大学へ進学するが中退し、龍谷大学経済学部へ再入学するも中退。その後、京都祇園のクラブなどで歌手生活をスタート。1971年レコードデビューを果たすが、内容が刺激的かつ退廃的という理由から発売禁止となる。1973年に初のソロコンサートを契機に再デビュー。現在では歌手活動の他に「たかじんのそこまで言って委員会」（読売テレビ）など3本のテレビ番組の司会者として、独特の話術で視聴者の支持を得ている。芸能人との交友も幅広く、堀内孝雄は高校時代からの同級生でもある。

の怒り」ってのを誰もやってなかったって発見したんですよ。いつか自分にテレビの仕事が来たら、絶対にこのラインや…って思ってたんですよ。

木村 それは年齢とのマッチもありますよね。

やしき それと競合が居ないんですよ。そろそろ世代交代の時期が来てもいいなあと思ってるんですけどね。

木村 五九ですよ。

やしき 団塊バリバリですよ。

木村 ファイブエル読者は団塊世代に向けて発信してるんですけど、その年代って会社をリタイヤして、次をどうしようと思ってる人が多いんです。そういう世代に向けて、何かアドバイスを頂けませんか。

やしき ひと言で言うところ「興味」じゃないですか。団塊の世代は人生の総決算の時期ではないんですよ。今まで出来なかった空間を自

由に探検できるチャンス到来の時期なんですよ。ただ、日本人はそこで制御する人が多いんです。

木村 分別ってやつですね。

やしき もう元気で生きられるのは一〇年そこそこですよ。そんな時期に自分を制御するのはナンセンスやと思いますねえ。アメリカ人の場合は、若い時からリタイヤを夢見て仕事して来たわけです。ところが日本人はがんばる事しか知らんから、みのもんだなんかにリスペクトするんですよ。朝から晩まで働いてるみのもんだを見て安心するんですよ。あんなに働いたらあかんです。あいつが戦犯ですよ。働き過ぎ（笑）

木村 東京が嫌いってのは一環してますね。

やしき 僕も三年ほど住みましたけど、余分なものが多すぎて、肝心なものが薄すぎる。このバランスの悪さが気持ち悪い。だから大

阪はもうちょっとがんばらないとあかんですわ。

木村 そういや東京の番組ってスタッフ多過ぎますよね。

やしき ほんまに多すぎますわ。何もしてないスタッフが周り取り囲んで、何しとんねんって感じですよ。

「そこまで言って委員会」は絶対に全国ネットにさせない

木村 大阪発全国ネットのテレビ番組はありますか？

やしき それは全然あります。ただ「そこまで言って委員会」は絶対にネットさせません。



すか？ もちろん日本も路頭に迷うんですけども、そこで物事の根本を見つめ直しい機会やと思います。

木村 団塊はそういう意味で貧しい時代を知ってますから強いですよね。

やしき そもそも、だいたいコンビニが二四時間やってる必要がありますか？ 普通の人間やったら夜中の二時くらいまでで十分じゃないですか？ 防犯の観点を言う人がいるけど、夜中歩いてて危ないって夜中に明るいから出ていくわけで犯罪も起こるんですわ。

ビジネスって拡大一辺倒しか行き場が無いわけでしょ？ そうなると世界にまで行くしか無いわけです。もう止められない。

木村 企業のそういう風潮には僕も危機感を感じますね。そもそも物事には王道と霸道があつて、霸道はどうしても権力を求めますよね。やっぱり王道を行くべきなんですよね。

やしき そうやと思います。王道を極めるには時間が掛かるけど、簡単に出来たものは、簡単に壊れやすいですよね。お笑いの世界でも毎年新人が入って来て、ビジネスの回転合わせて使い捨てられる人間もどんどん増えて行ってますよね。それでいいのかあとというのは思いますね。ホンマもんがわかりにくい。

木村 ずっとインディーズでしたけど、大手の芸能プロダクションとかからお誘い出てから、きっぱり辞めようと思ったんです。それがグランプリ獲って、そこから勢い付いて東京進出となったんです。

木村 麻生首相なんかはどう思われてますか？

やしき 一言で言うとはポンですね。育ちが思想のほとんどを決めると思うんです。政治家になつてはいけなかった人やと思いますね。基本的に頭が良い方じゃないみたいですよ。

人の器を大きくするのがプロデューサー

木村 最近プロデューサーとしての動きも多いですが。

やしき 知事（橋下徹大阪府知事）や市長（平松郁夫大阪市長）と、今でも三人でメシ会やってますよ。彼らも仕事だとお互いに自由には会えないんですよ。僕はもともと二人とも知ってるからね、気楽に空間を作るぐらいのお手伝いは出来るかなと思って。雀々（桂雀々）の独演会も、最初はもつと小さいホールでやってたんですけど、器が人を大きくするつてもあるし、客を集める企画は考えるから、大きなホールでやってみたらと言っただけです。その人の器を拡げ



かは無かったですか？

やしき それはなかったですね。今になって業界が解って来て、ブルったのは確かですけど、まあ音楽がありましたからね。

木村 お笑いと音楽でそれぞれ賞を獲ったのはやしきさんが唯一ですもんね。それと宝塚の舞台に最初にたった男性らしいですね。**やしき** 鳳蘭さんが全盛の頃に、外部の作曲家を起用しようとなったらしくて、ある演出家がたまたま声をかけてくれたんです。何曲か作って最終的にコーナーを担当する事になったんですけど、突然「あなた出る

るのがプロデューサー的だとすれば、そうかもしれません。

木村 あれは観させてもらいましたが、面白かったですね。落語ファン以外の人の心を掴んでましたもんね。

やしき 最近、気になるのはね、この芸能界のサラリーマン化が酷いんですよ。やっぱり小室（哲哉）みたいな奴が居ないとダメなんです。やった事は悪い事ですけども、ああいう音楽バカみたいな、そもそも壊れた人間の集まるのが芸能界なんですから。どっか飲みに誘ったら、子供風呂入れるからという理由で断る芸人にはビックリしました。

木村 遊ばなくなりましたね。みんなちょっと売れたら家をまず建てますよね。やっぱり無頼派の先達になつてもらわないと。

やしき 上岡龍太郎さんはずっと辞めてしまうし、気がついたら居ないんですよ。これがホンマの芸人やという人が少なくなってきたのはちょっと悲しいですね。芸人って生き方やと思うんです。芸やる人間はみんな芸人やと思うしね。

木村 かつこよく引退とかしないで、いつまでもがんばって下さいよ。

やしき 辞め時も視聴者とか世間が決めることで、それを芸人が独断で決めるのは横柄やと思うんです。だいたい雰囲気かわかると思いますしね。

木村 一〇年後何をやってると思いますか？

事になりました」ってダンサーと同じ髪型させられてね、やりました。それが戦後、宝塚の舞台に男が最初に出たというワケです。でもこの事はその後、随分心の支えにはなりましたよ。辞めようかなという節目で、そんな事がいつも起こりますねえ。

木村 本気で辞めようと思った事もあったわけですか？

やしき 三〇歳の頃、本気で辞めようと思ってた時なんです。その頃に大阪大衆音楽祭というイベントがあつて、フェスティバルホールだけ出演した事がなくて、このイベントに

やしき 朝からこらー！ てどこかのテレビで言うてるんじゃないですか（笑）朝の五時半くらいから（笑）今度雑誌の編集長をやるんですよ。出版社の人間と飲んでる時に、言ってしまったんでしょうね「俺に任せろ」って。自分が今まで興味持ってきた、京都とかハワイとか、そこらを中心に特集を組んで、季刊誌としてやります。それと映画監督も初挑戦するんですよ。もちろんテーマはお笑いの世界です。

来年還暦なんですけど、「爆発する還暦」をテーマにやりますよ。本業の音楽も七年ぶりのツアーをやりますしね。

すべて、エンタテインメントに徹しようと思ってます。

木村 「爆発する還暦」いいですねえ。是非とも今後もどんどん爆発してくださいよ。本日はありがとうございました。

（後記）対談場所に現れた、たかじんさん。何故か右手に包帯が……。きつと何処かでの武勇伝の名残なのだろう。過激な発言、そして奔放な振る舞い。その奥に秘めた繊細な感受性。何とも魅力に溢れたキャラクターである。関西に生まれて良かったと思う。だって、関東にいたら、こんな魅力的なキャラクターを知る術も無かつたのだから。（木村）